マイケル　お別れ

中国の上海にある大学の寮で暮らしている息子が、電話口から家内に向かってわんわんと大泣きした。マイケルの亡くなったことを、家内が伝えたからである。2歳の時から尻尾であやしてもらって育った息子は、自然とマイケルを第2の母と思っていた。高校時代に留学に出る朝には、息子を行かせまいとしてか、スーツケースの中におしっこをして、大騒ぎを巻き起こした。その息子も二十一歳になっていた。

晩年のマイケルは餌も食べられなくなって、ほんとに小さくなった。最後の一週間は水も口にしなくなった。そうなった時は覚悟して下さい、と獣医から言われていたので、上海にいる息子にも伝えた。マイケルを見たいという息子の願いに応えるべく、機械苦手の両親は必死になって、上海の息子の部屋のパソコンとスカイプでつないだ。ボロボロヨレヨレといっていいマイケルの顔立ちや様子を見て、息子は終始ニコニコ顔で、満足したようだった。

「うん、もういいよ。」

マイケルはもう声も出ない。代わりに名前を呼ぶと尻尾を動かして返事をした。

最期、家族三人に見守られる中、顔を上げて一人一人に声の出ない挨拶をしてくれた。それから静かに息を引き取った。大往生だった。箱に移して周りを花で飾ると、「持ってくね。」と言って、娘が二階の自分の部屋へ持って行き、一晩添い寝した。息子にも亡くなったことを伝えた。

マイケルと暮らした二十一年間の日々、数え切れない幸せを家族はマイケルからもらった。

だから亡くなった日は、我が家のもう一人の母に「ごくろうさま。ありがとう。」と感謝をした日だった。